
キズナ

江口 凜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

キズナ

【Nコード】

N4971X

【作者名】

江口 凜

【あらすじ】

「お前の最も大切な者が、災いをもたらす存在であつたらどうする――？」

神の血をひく神族でありながら、人間にその存在を否定された一族――イヴェーレ。

人間を寄せつけず、ただ一人で旅を続けるアリシアを助けたのは皮

肉にも人間だった。

何故男はアリシアの側にいたいと願うのか。

何故アリシアは旅を続けるのか。

それぞれの『本当の想い』を胸に秘めたまま、二人の旅が始まった。

二人が出会ったことで動き出した運命。

先にあるのは破滅。

それとも――。

信じる心は『力』になる。

そして絆は、闇に沈む運命を断ち切る『刃』になる。

この小説は他サイトでも掲載しています。

男は街へと続く山道を歩いていった。山道と言っても、それはある程度整備され、歩くことに何一つ支障はなかった。ここは人々が行き交うための街道なのだ。道の両側には木々が鬱蒼と茂っていたが、僅かに差し込む陽の光のおかげで不気味さはない。

旅人である男は、傾き出した太陽を気にして歩調を速める。日が暮れるまでに街に着きたかった。夕刻の閉門に間に合わなければ、朝まで街に入ることが出来なくなるからだ。

何故、門が閉じられるのか。

それは、夕暮れから夜にかけて、魔族が活発になる為だ。

魔族とは同族以外の全てを——場合によっては同族さえも——襲い喰らう存在で、人間にとって恐怖の象徴だった。下位の者ほど獣に近い姿をしていて、力のある上位の者ほど人の姿に近いと言われている。その魔族が街に入り込まないように、どの街も夜の出入りは禁じていた。

と、何かが森の中を走り抜けているような音が聞こえて、男はピタリと足を止めた。こちらに——近づいて来る。

（なんだ？）

男は街道の脇にある茂みへと視線を走らせる。その瞬間、茂みを揺らす音と共に人影が飛び出してきた。

「!」

一瞬目が合う。

口元を隠し、フードを被っているのも男か女か判らない。だが、そのしなやかな動きから女だと感じた。

声をかけようとしたその時。

激しい咆哮が轟いた。

「!!」

見上げた先にいる声の主は、首が二つある朱毛の獅子。その大きさは普通の比ではない。

「嘘だろ…」

魔族を避けるために街へ急いでいたというのに、その相手に出会ってしまった。男は自分の運の悪さに呆れた。

全身をマントで隠す女らしき人物は魔族と戦う体勢に入った——
が、よく見ると肩で息をしていてかなり苦しそうだ。

男はちらりと太陽を確認し、魔族に目を戻す。

「さっさと終わらせるか…」

ぼつりと呟くと、男は両手を鳴らした。乾いた音が響く。
すると、男の足元に円形の術式——錬成陣が浮かび上がった。

「閉ざされし世界 赤白の螺旋 闇を駆ける黒犬を従えし者よ」

男の詠唱に呼応して、鍊成陣が光を発し始める。
詠唱。

それは、術を発動させる為のコトバ。
幾つかの単語で構成されており、火・水・風など、それぞれの術によってコトバは変わる。ただし、コトバを唱えれば誰しもが術を発動できるわけではない。持って生まれた力——神力と言われるそれが無ければ、どんな小さな術も使うことはできなかった。

「掻き消せ——『ニーガル クラウム』」

男の足元が一層強く光った瞬間、朱い獅子は黒い竜巻に包まれた。周りの木々も、根を伸ばす地面ごと風の中に飲み込まれていく。
マント姿の人物は、風に自分がもっていかれないように踏ん張りながら、黒髪の靡く男とその術を見ていた。

短く、獣が鳴いた。

それが合図だったかのように、竜巻は徐々に細く緩やかになり——
——やがてフワリと消えた。

魔族がいたはずの場所には血溜まりしかない。

「貴様…何者だ？」

問いかける凜とした声は女のもの。

（やっぱり女か…）

「ただの人間だ」

「ただの人間が“あんな術”を使えるものか。貴様も——」

女は手を背中に伸ばす。

まるで後ろから剣を引き抜こうとするかのように。

「魔族か」

「何？」

女の手に集まり始めた力が凝縮していく。だが形を成すことはなかった。

「…くっ…！」

ぐらりと揺れた女の身体は、そのまま倒れ込んでしまったからだ。

「おい」

近寄って声をかけても、起きる気配は無い。

よく見ると女は傷だらけで、血を吸った布は乾いて赤黒くなっていた。

「……」

やれやれとばかりに、男は大きなため息をつく。

空を見上げると、太陽はかなり傾いている。街の閉門の時刻が迫っていた。

「なんとか間に合ったな…」

宿屋の窓から通りを行き交う人々を見下ろしながら、男は呟く。
日はほとんど沈み、家や店には明かりが灯り始めている。

扉を叩く音がして、男は振り返った。

開けると、宿屋の主人が食事を持って立っていた。白い髭を蓄えた気の良さそうな初老の男で、家族でこの宿を営んでいるらしい。家族で、と聞くと小さな宿屋を想像するが、ここは三階建ての立派な宿屋だった。目の前の主人は、案外やり手なのかもしれない、と男は思う。

「お連れさんの様子はどうだね？」

「まだ寝ているが…もう大丈夫だと思う」

「そうか、それは良かった。食事だよ」

礼を言って、主人から食事を受け取る。

「食べ終わったら、食器は廊下に出して置いてくれ」

「分かった。ありがとう」

主人を見送り、静かに扉を閉める。

食事をベットの脇に置いた男は、横に眠る女に目をやった。

灰色がかった白い肌。

漆黒の髪。

尖った耳。

女は、人間ではなかった。

この世界には、人間以外の種族も存在していた。エルフ、小人、巨人、獣人、そして神の血を引く神族。それぞれはさらに幾つかに別れており、全ての種族の数ははつきりしていない。彼らは独自の文化を發展させ、そのほとんどが、人間が簡単には辿り着けないような森の奥地や、極寒の大地などで暮らしていた。

「…っ…」

女の目が開く。

「…っ…は…」

「気分はどうだ？」

女は男の存在に気づき、飛び起きた。

「貴様…っ！」

警戒心を剥き出しにして男を睨みつける。

女が睨みながらも出入口を確認したことに気づいて、男は頭を掻いた。

「…そんなに睨むな。それが手当をした相手に対する態度か？」

女は自分の腕に巻かれた包帯を見て、ほんの少しだけ警戒を緩めた。不器用に巻かれたそれが、素人が巻いたものだと一目で分かったからだ。

「…何故、助けた？」

「何故って…目の前で人が倒れたら助けるだろう、普通」

「医者にでも連れて行けばいいだろう。わざわざこんな…」

女は自分を助けた人間がいることが信じられないようだった。何を企んでいる、とでも言いたげな目で男を見ている。

その瞳は鮮やかな——金色。

綺麗だな、と男は思う。

「答える」

「…あまり人前には出たくないかと思ったんだが…違ったか？」

「…！」

女はシーツを握り締め、さらに睨んだ。だがその瞳には、先程までの殺気は無くなり、動揺と哀しみのようなものが見てとれる。

「だから睨むなって」

男は女の額に手をあてた。

「少し熱があるな。まだ寝て…」

言いかけた男の手を、女は思い切り払いのけた。拒絶の音が部屋に響く。

「痛っ…」

「触るな!!!」

「…そんなに怯えなくても何もしないさ」

「怯えてなど…っ」

男は扉に向かう。

「俺がいたら落ち着かないだろうから少し出てくる。メシ食ったらちゃんと寝とけよ」

背を向けたままそう言うと、男は部屋を出た。が、すぐに扉が開く。

「逃げるなよ」

再び扉が閉まり、男の気配が遠のいた。今度は本当に行ったようだ。

女はベットの横に置いてある食事に目をやり、少し迷ってから手を伸ばした。

男のことを考えながら呟く。

「…信じるな…」

その瞳は、氷のように冷たかった。

一方、宿を出た男も女のことを考えていた。
大通りから女のいる部屋を見上げる。

「…金眼^{きんがん}の鬼神——か…」

女は真夜中に目を覚ました。

ゆっくりと体を起こす。頭がぼんやりとしてうまく働かない。

（ひどい汗だな…熱のせいかな…）

手で汗を拭い、女は思い直す。

（いや…熱のせいだけではない…）

夢を、みていた。毎日のようにみる、いつもの夢。

（忘れるな——ということか）

女は自分で出した答えに首を振る。

夢にみなくとも、忘れるわけがなかった。それは自分の記憶そのものののだ。

目が暗闇に慣れた頃、ベッドから出てそっとカーテンを開けた。
空の端には月。

街はすっかり寝静まり、明かりはその月だけだ。

（そうだ…忘れなど…するものか…）

女はしばらくの間月を眺めていたが、ふと、あの男のことを思い出した。

部屋を見渡すと、男はソファで窮屈そうに寝ていた。足がはみ出している。男の身長を考えると、ソファで寝るよりも床で寝た方が楽なように思えた。

そういえばこの部屋にはベッドが一つしかない。この部屋しか空いていなかったのか、それとも金の問題か——男に聞けば分かるだろうが、女は聞こうとも思わなかった。どうだっていいことだ。

女は男が起きないように、静かに近づく。

（こいつ、全身黒だな…）

男は髪も服も黒だった。黒い手袋までしている。

（違うのは上に着ているマントと肌の色くらいか…瞳の色も違ったか…？）

女は昼間の顔を思い出そうとしたが、まったく思い出せなかった。女にとって、人間などその程度の存在だった。

それにしても、いつの間に戻ってきたのだろうか。まったく気が付かなかった自分に女は驚いた。

女はいつも、何が起ころうともいいように熟睡していない。眠りが浅いのだ。だから誰かが部屋に入ってくれば、絶対に気がつくはずだった。

（…それだけ体力が落ちているのか…）

深く眠り、回復しようとしているのだろう。

冷たい眼で男を見下ろす。

人間は信用できない。

それが過去の経験からの教訓だった。どんなに親切でも、どんなに優しくても、結局は皆同じだ。女の正体を知れば、忌み嫌い、呪いの言葉を吐き散らす。自分達に害があるかもしれないと判断すれば、何をしてもいいと思っている。例えそれが、独り歩きした噂話からの判断だったとしてもだ。

この男は気づいている。そして、噂話を知っている。

自分の身は、自分で守らなければならない。

また、命を狙われるくらいなら。

（殺すか――）

手刀を構える。

と、手に巻かれた下手くそな包帯が目に入った。

「……」

女は手を下ろした。

男の傍を離れ、ベッドに戻る。

（こいつを殺すのは、もう少し後でも遅くはない……）

そうだ。今はこの男の助けが必要なのだ。一刻も早く傷を治し、体力を回復する為に。

元に戻れば、人間などどうにでもできる。

男は神力を持つ術者のようだが、魔族を退ける力を持っているということは、女にとって幸いだった。術を見た限り、襲撃があっても簡単には殺されないだろう。

（利用させてもらっさ……）

そんなふうに考えながら、ベッドの中に潜り込む。

女は自分の胸に、何か苦いものが広がったような気がしたが、気づかないふりをして目を閉じた。

「…信じるな」

強く自分に言い聞かせる。

もう、誰も信じないと決めたのだから――。

女は眠りに落ちていった。

02

男が包帯を取り替えていると、女が目を覚ました。

「起こしたか？ もう終わるからじっとしてろ」

そう言われて、女は払いのけようとしていた動きを止めた。

「よし」

言った途端、女は手を引っ込める。

「もう少し安静にしてた方が良さそうだな。何か欲しい物はあるか？」

「……」

「……」

「……」

男は一向に顔を上げない女の頭を掴むと、無理矢理自分の方に向けた。

「貴様、何を……」

「何か、欲しい物は、あるか？」

「……水……」

「水、な。貰ってくるからちょっと待ってろ」

女の頭を離すと、男は立ち上がった。

「……お前、名前は？」

「……」

「名前、は？」

また頭を掴まれそうだったので、渋々答える。

「……アリシア」

「アリシ、ア……」

男が驚いたような表情を見せたので、女――アリシアは眉をひそめた。

「……何だ……？」

「……いや、なんでもない。俺はシヴァだ」

シヴァと名乗った男が部屋を出て行った後、アリシアはため息と共に肩の力を抜いた。無理矢理回された首が痛い。

「…変な奴…」

それから数日経った。

体力が回復し、傷もだいぶ癒えたアリシアが身支度を整えていると、どこに行っていたのかシヴァが戻ってきた。

「行くのか？」

問いかけるシヴァの顔を見ないまま返事をする。

「ああ、世話になったな」

「どこに行くんだ？」

その問いに、深い意味はなかったのかもしれない。しかしアリシアは過敏に反応した。

「…聞いて…どうする」

平静を装ってはいるが、顔は強張り、声には殺気が満ちている。その殺気に気づいていないのか、シヴァはアリシアの近くにある椅子に座った。

「どうもしない。聞いてみただけだ。気に障ったなら謝るが」

シヴァの言葉から敵意は感じない。だが本当に他意がないのか分からなかったから、それ以上会話を続けることはしなかった。

しばしの沈黙の後、シヴァは唐突に話し出した。

「西の果てに、イヴェーレという神族が住んでいるのを知っているか？」

「…何の話だ」

「イヴェーレは剣技を得意とする少数部族で、戦闘において彼等に勝る者はおらず、戦う様は鬼のようだと言われている。他の種族——特に人間は、自分達には手に入れることのできない“強さ”を持つイヴェーレに対して、恐れよりも敬意の念を抱いていた」

アリシアは黙って話を聞いているが、その表情は暗い。どうやら止めないだけで聞きたいわけではないようだ。

「意味なく戦いを求めることは無く、その力は一族を脅かす相手へのみ向けられていたからだ。だが：“何か”が人の心を変えた。力への敬意は恐怖に変わった。血と争いを好むと言われ、人間はイヴェーレを忌み嫌うようになった」

アリシアは拳を握り締め、目を伏せる。

「元々少なかった他種族との交流は、これによって皆無となり、今ではイヴェーレは幻のような存在になっている。それでもまだ、人間の中にイヴェーレに対する恐怖は根強く残っているらしい」

ここまで話して、シヴァはアリシアを見た。

「そして、恐怖以外にも残っているものが一つある」

「…残って…いるもの…」

「異名だ」

「……」

「イヴェーレは一族特有の瞳の色を持っていた。その色は——金」

逸らされていたアリシアの美しい瞳が、シヴァを見据える。

「この世界で金の瞳を持つのはイヴェーレ族だけだったことから、それは殺戮者の証となった。人間は、神の血をひく神族であるイヴェーレを皮肉を込めてこう呼び始める。——『金眼の鬼神』」

アリシアは無言で、一歩下がった。

「…そこまで知っていて、何故手当を続けた？」

「そんな話、信じてないからだ」

シヴァの即答は、アリシアの心に逆に警戒心を生んだ。信じてい

ないと言い切る人間に出会ったのは初めてだった。

また、一步下がる。

アリシアが後ろ手で窓を開けようと手をかけた丁度その時、大地を揺るがすような、低い獣の雄叫びが響いた。

「!!」

「魔族だ!!」

街の中で、誰かが叫んだ。その声は次第に大きく広がり、悲鳴と怒号が飛び交う。街は恐怖に包まれた。

「街の中に魔族だと？ しかもこんな時間に…？」

シヴァは確認しようと、アリシアが手をかけた窓を開けて外を見た。

しかし、それらしき影は見えない。

「…私がいるからだ…」

小さな声でそう言うと、アリシアは開いた窓に腰をかけ――。

「おいっ?!」

天を、仰いだ。

シヴァはとつさに手をのばす。

しかし一瞬遅く、アリシアは最上階から落下した。

「アリシア!!」

窓から身を乗り出したシヴァが見たのは、空中でゆっくりと一回転し、静かに着地したアリシアの姿だった。

アリシアは逃げ惑う人々の流れに逆らうように歩き出し、姿を消した。

「あのばか…っ!」

言って、部屋を飛び出す。

シヴァに迷いはなかった。

シヴァはアリシアを探さなかった。アリシアはおそらく魔族のところへ行った。ならばそこを目指せばいい。

人々が逃げてくる先。

そこにアリシアはいる。

シヴァは人混みを掻き分けるように前へ進んだ。

進むにつれ、獣の唸り声と悲鳴が大きくなる。それに比例して、

血の匂いも強くなった。

（いた…！）

街と外を隔てている壁を破壊し、魔族が侵入している。それは、数日前シヴァが倒したのと同種の魔族——双頭の朱獅子だった。前回と違うのはその数だ。

（三、四…五……八頭か？）

シヴァは数を確認すると、追っていた人物の名を呼んだ。

「アリシア！」

アリシアは魔族と対峙していた。こちらを見ることもなく、冷淡な声だけが返ってくる。

「何をしにきた、人間」

「一人でやるつもりか？」

「ああ…手助けなどいらぬ」

アリシアは、背中に手をのばした。シヴァと初めて会った時のように。

手に力が集まりはじめ、凝縮されていく。

「人間、巻き込まれたくなければ下がっている」

形に成りだしたそれを握り締め、背から勢いよく引き抜いた。
現れたのは両刃の大剣。柄も、刀身も白銀で美しい。

アリシアは飛びかかってきた魔族を半身ずらして躲すと、自分の身体ほどもある大きな剣を軽々と振り上げ、一気に振り下ろした。鈍い音をたてて二つの首が地面に落ちる。返す刀で別の魔族の胸を斬り裂いた。

「次」

一頭ずつ、確実に仕留めていくアリシアをシヴァは見ているだけだった。

（圧倒的だな…）

一応いつでも術が発動できるようにしていたが、必要なさそうだ。アリシアは呼吸一つ乱れておらず、それどころか返り血一つ浴びていない。

最後の一頭を斬り伏せると、アリシアは大剣を地面に突き立てた。くるりとシヴァの方を向く。

「まだいたのか」

「悪かったな」

柄を握っていた手を離し、スツと払う。すると大剣は柄のあたりから、さらさらと崩れはじめた。

小さな光の粒子となった剣は、やがて空気に溶けたかのように消えた。

「強いな。この前はどうしてあんなにボロボロだったんだ？」

「何日もまともに寝ていなかったんだ。奴らしつこくてな」

「奴らって…何日も魔族に襲われ続けてたって言うのか？ そんなことあるわけ…」

「人間」

シヴァの言葉をアリシアは遮る。

「私に関わるな」

その目は、酷く冷たい。

「私に関わると——死ぬことになる」

そう言つと、アリシアは魔族が破壊した壁から、街の外へ出ようとした。

その時。

「おい、見ろ！ 金眼の鬼神だ！！」

遠巻きに集まっていた人間の誰かが叫んだ。
途端に、ざわり、と空気が変わる。

人々は殺気立ち、アリシアを罵り始めた。まるでこの災いをもたらしたのが彼女であるかのように。

「出ていけ!!」

また誰かが叫び、直後に石が飛んだ。

アリシアの額を掠めたそれは、乾いた音をたてて地面に転がる。額にじわりと滲み出す赤い血。

それがきっかけになった。

次々に石を投げつけ、群衆は叫ぶ。

「化け物!!」

「化け物!!」

「化け物!!」

「化け物!!!!」

アリシアは無表情に人々を一瞥すると、背を向けた。

「おい、ちょっと待て!!　アリシア!!」

アリシアがシヴァの声に足を止めることはなかった。

アリシアは人目を避けるように街道を逸れ、山の中に入った。
黙々と歩く。

まだ日は高く、光が差し込む森は明るい。

アリシアは太陽を見上げ、眩しそうに目を細めると光を遮るよう
に手を翳した。手についている僅かな赤が目に入る。さっき額に触
れた時についたものだ。

アリシアは翳した手を下ろし、その手に視線を落とした。

——化け物！！

人々の声が蘇る。

恐怖。

憎しみ。

畏怖。

全ての負の感情。

それらがないまぜになったあの——瞳。

血の付いた手を強く握り締めると、アリシアはその場に座り込ん
だ。両膝を抱え込み、その腕に顔を埋める。

罵られるのは慣れていた。しかし今日は胸がざわつく。

「…あいつの…せいか——…」

何故いつもと違うのか、アリシアには一つだけ思い当たることがあった。

それはシヴァだ。

誰も信じないと決めてから、どれくらい経つのか分からない。誰かを信じる度に裏切られた。寝ているところを殺されそうになったこともある。

そんな日々はあまりに辛く、自ら命を絶つことも考えた。だが、それを思いとどまったのは、果たさなければならぬ目的があったからだ。

どれだけの人間に忌み嫌われようとも——化け物と呼ばれ、存在を否定されようとも、目的を果たすまでは生きなければならない。

だから、心を捨てた。

目的の為に、生きる為に。

他人との交流。

そこから生まれるありとあらゆる感情——喜び、怒り、悲しみ、嫉妬、楽しみ、安らぎ。

そして。

絆。

望むから裏切られるのだ。
裏切られるから辛いのだ。
だったら、もう何も望まない。

何も。

いない。

そう決めて生きてきた。

なのに、たった数日シヴァと過ごただけで心がぶれた。だから平気になっていた人々の罵声に胸がざわつくのだ。

アリシアを助け、噂話など信じないと言い切ったシヴァ。その真意すら、解りはしないのに。

アリシアは悔しかった。

自分の決意とは、これだけのことで揺らいでしまう程度のものだったのか。

こんなにも、容易く。

どれくらいの時間が経っただろう。アリシアは視線を感じて顔を上げた。

すぐに反応できるように体勢を整えて、辺りを窺うが何の気配もない。

（気のせいかな——？）

アリシアは目を閉じて、深呼吸する。

胸のざわつきは収まり、乱れた感情も落ち着いてきた。

たしかにシヴァと過ごしたせいで心は揺らいた。けれど、一人に戻れば大丈夫だ。この数日の出来事など——シヴァの事などすぐに忘れるだろう。

ゆっくりと開かれたアリシアの瞳は、いつもの冷たい眼差しだった。

先程までの動揺など、まるでなかったかのように表情がない。

その視界が、突如何かの影で遮られた。
鼻先がつきそうなほどの近さに誰かが立っている。
背が高い。

反射的に顔を上げて――。

「貴様っ…！」

強い痛みがアリシアを襲った。

シヴァは焦っていた。何故だか胸騒ぎがする。

（あいつ…どこに行ったんだ…）

街道沿いに進んでみたがアリシアはいなかった。すれ違う旅人に聞いても、それらしき人物は見えていないと言う。

アリシアの神力の気配があれば、それを頼りに追うことができるのだが、肝心のそれを全く感じない。恐らく、アリシア自身が気配を消しているのだろう。

仕方なく元の街に戻ろうとした時、街の近くにある山の方に何か

を感じた。

アリシアの気配ではないが、気になる。
あんなことのあった後だ。人間を避けて山に入ったかもしれない。
そう思っ、シヴァは山へと足を向けた。

なだらかな斜面を登り、歩き続ける。

かなり奥まで来た時、誰かの話し声が聞こえた。

男の声。

木の蔭に身を隠して目を凝らすと、二つの影が見えた。

「！！」

一人はアリシアだった。首を絞められ、木に押さえつけられている。

（適当に歩いたわりには、早く見つかったな…）

「がつ…っ！」

アリシアの苦しそうな声が聞こえて、シヴァは飛び出しそうになったが、理性で止めた。

さっきの声の主であるもう一人の人物——黒いマントで身を包む男の正体が分からないからだ。

分からない上に嫌な感じがする。

アリシア同様気配を消していることから、ただの人間ではないことだけは確かだった。

シヴァの場所からは男の後ろ姿しか見えない。つまり、向こうからもシヴァは見えない。

シヴァは小さく手を鳴らすと、詠唱を始めた。

「黒の竜舌 間の支配者 血よりも深い盟約と足枷」

シヴァの錬成陣の光に気づいたのか、黒衣の男が振り返った。その顔は仮面で隠され、口元しか見えない。

「捕らえろ——『デイリム セルクル』」

黒い光の輪が仮面の男の足元に浮かび上がる。

「……」

輪の下から上に創られた光の壁は、男の動きを封じるもの。その手が、アリシアの首から離れた。

「が……は……っ」

顔を歪め、地面に手をつくアリシアの傍に駆け寄る。

「アリシア！」

「……お……前……何故、ここ……に……」

アリシアは短い呼吸を繰り返す。息をするのも苦しいようだ。

「……に……る……」

その声は小さく切れ切れで、シヴァには届かなかった。

「なんだ？」

「逃げる、とその女は言ったのだ」

シヴァの問いに答えたのは仮面の男だった。

男は少しずつ、けれど確実に手を動かしていく。

（動けるのか?!）

シヴァは驚いた。

『ディリム セルクル』は黒い光で相手を囲み、その動きを封じるものだ。並の魔族なら、指一本動かすことは出来ない。

「この術…そうか、お前——」

仮面の男は納得したように呟くと、光の壁に手をあてて力を込めた。

耳に届いたのは、ガラスの割れるような音。

光の壁が粉々に崩れ去る。

（こいつ——やばいな…）

この男が何者なのかは分からないが、強い力を持っていることだけは確信が持てた。

庇うようにアリシアの前に立つ。

「…まさかこんな所で会うとはな」

その言葉に、シヴァは眉をひそめた。

こんな奴と面識はない。

「俺を知っているのか？」

仮面の男はニヤリと笑うと、背後に闇を出現させた。だんだんと、闇に同化していく。

「今日のところは、お前に免じて退くでしょう——シヴァ＝アビス」
「！！」

仮面の男は、闇と共にシヴァの前から消えた。

シヴァは男のいた場所を見つめていたが、すぐに、まだ息の荒いアリシアに声をかけた。

腑に落ちないことはあるが、今はアリシアの手当てが先だ。

「大丈夫か？　すぐ街で手当てを——」

抱き抱えようとした腕を制止するように、アリシアの手が掴む。シヴァの服が、血で濡れた。

アリシアの右手には、何かで貫かれたような深い傷があり、出血が酷い。

「お前、この手……」

「……かまうな……私の……となど……ほってお……け……」

虚ろな眼で、シヴァを睨むアリシアだったが、長くは続かなかった。

「私に…関わる…な——…」

言葉と共に意識を失い、倒れ込む。

「……出来るわけないだろ」

シヴァはアリシアを抱き上げると、その場を後にした。

暗闇の中に、アリシアは一人立っていた。
瞳を動かして左右を確認するが、何も見えない。

——…シア…

誰かの声が聞こえた。

——…シア…アリシア…

声はアリシアの名を呼び続けている。

（この声は…）

アリシアが足を踏み出した瞬間、辺りに青白い炎が灯った。
ぼんやりと周りが見える。そこに広がる光景に、アリシアは愕然
とした。

一面の——屍体。

「こ…これは…」

灰白色はいはくしよくの肌と尖った耳。

死んでいるのは、全てイヴェーレ族の者だった。

——アリシア…

また、声。

しかし、今度は一人の声ではない。大勢の声が重なって反響している。それはまるで、横たわる同族達が自分を呼んでいるようで。

足元の屍体に優しく触れた。

「…みんな…すまない…」

アリシアの顔が、悲痛に歪む。

——逃げる！　アリシア！！

男の叫び声で、ザワザワと響いていた無数の声が掻き消された。

——逃げるんだ！！

「…ラウ…ム…？」

それは懐かしい声だった。
大切な人の、声。

「! !」

いつの間にか、前方に一人の男がいた。男は全身に負った傷から血を流し、今にも倒れそうだ。

それを見たアリシアは、立ち上がると同時に走り出した。

「ラウム！」

アリシアの声に、男が微笑む。

その手が。

男の体に届くその時。

男は幾つもの黒い槍に貫かれた。
赤い血が舞う。

「……、……」

何かを伝えたいのか、男は口を開いたが、声になっていない。だが、愛おしそうに見つめるその目が、アリシアに対する想いを克明に現している。

アリシアの絶叫が闇に響いた。

階段を上がろうとしたシヴァを、宿屋の主人が呼び止めた。

「災難だったねえ。せつかく前の怪我が治ったっていうのに……」

主人はアリシアのことを気にかけてくれているようだ。

シヴァは、アリシアの傷を街に現れた魔族にやられたと説明している。

「具合はどうだい？」

「……あまり良くないな」

あの後、宿に戻ったシヴァはアリシアの手当てをした。
血は止まった。しかし傷口が黒く変色し、尚且つ上手く動かせないと言う。

もはや素人にどうこう出来るものではない。

そう思っただけで街の医者に連れていかれたシヴァの手を、アリシアは当然のように拒んだ。

医者に症状を伝えるだけ伝えてみたが、匙を投げられた。

「街のはずれに白師はくしがある。行ってみてはどうだね？」

「街にいるのか？ 珍しいな」

白師とは、白術はくじゆつ——守りの術を使う者のことで、結界や治癒を得意いとしている。反対に、攻撃の術は黒術くろじゆつと言い、その術者のことを黒師こくしと呼ぶ。

白術は黒術より扱いが難しい為黒師よりもその数は少なかった。

エルフや神族には使える者も多いと言われているが、どちらも滅多に出会えない。人間に限っては、そのほとんどが聖職者——神に仕える者達で、しかも高位の者だけだった。

それだけに、聖職者以外で白術を使える者は貴重な存在であり、それがこの街にいるなど、極めて幸運だと言えた。

「場所を教えてください」

主人に地図を書いてもらい、受け取る。

地図を確認するシヴァに、主人は思い出したように言った。

「そういえば、金眼の鬼神がいたとか聞いたが…あんた見たかね？」

「いや、見てないな」

シヴァは一軒の建物の前で立ち止まった。
それはかなり荒れ果てた民家にしか見えない。だが、宿屋の主人
に書いてもらった地図は、確かにこの場所を示している。

「……」

「どうした、人間。早くしろ」

「……だから、ちゃんと名前で呼べって」

シヴァは返事をしないアリシアに目をやった。

顔も含めた全身をマントで隠しているの、誰にもイヴェーレだ
とは気づかれていないが、落ち着かないのだろう。いや、それ以前
にアリシアはすこぶる機嫌が悪い。嫌がるアリシアを、シヴァが無
理矢理連れてきたからだ。目を離したら、逃げてしまいそうだった。
逃げられる前に行動に移した方が賢明だと思ったのか、シヴァは
扉を叩いた。

「……」

反応がない。

もう一度叩く。

やはり反応はなかった。

「……」

扉を軽く押すと、わずかに開いた。鍵はかかっているようだが、そのまま扉を押しきる。

木戸特有の、耳障りな音を響かせ、扉が開いた。

「！」

中は更に荒れ果てていた。

壊れた家具が散乱し、部屋全体に埃が溜まっている。所々に蜘蛛の巣まであった。

人が住んでいる気配は微塵もない。

シヴァは部屋を見渡すと、奥の部屋への扉を開けた。

朽ちた家に入っていくシヴァを咎めもせず、アリシアもそれに続く。

奥の部屋も、さっきの部屋と同様で、人の住める状態ではなかった。

「どけ、人間」

アリシアは鋭い目で部屋を見回すと、左手を背に回した。

「こういつ奴は気に入らん」

シヴァはその手を掴む。

「待て、アリシア」

「離せ」

「…おい、いい加減出てこい」

アリシアの手を掴んだままのシヴァの声が、誰もいない空間に響く。

と、部屋の中に風。

その風と共に、空間が——部屋の景色が散り始めた。

それはまるで花吹雪のように、散った景色の下から現れた別の景色の中を舞っている。別の景色と言っても、部屋ではないし、ましてや外でもない。

白だけの世界。

ただ白いだけの空間が広がっている。

ふわりと落ちてきた花びら——散った景色の欠片を受け止めて、アリシアは呟いた。

「——別の結界を張ったか…」

「さすがですね」

いつの間にか、二人の前に若い男が立っていた。
にこにこ笑っている。

「さっきの結界の中で、僕の気配に気がつくなんて」

「結界とは、荒れた部屋のことか」

「そうです。結界の中に造った偽りの景色」

「何故結界を創り、姿を隠していた？」

「関係のない人間に僕の存在を知られない為ですよ。もちろん魔族にも」

アリシアの問いに対する男の答えに、シヴァは首を傾げた。

「俺はここを宿屋の主人から聞いたんだが？」

「ああ…それは、僕が彼の口を借りたんです。地図を書くまでね」

「なっ…？ 白師はそんなことまで出来るのか？」

男はにっこり笑ってシヴァを無視すると、アリシアに話かけた。

「何か言いたげですね」

「…人間の口を借りてまでこの場所を伝えたということは、私達と接触するのが貴様の目的なのだろう？ ならば何故すぐに現れなかった？」

男は笑みを浮かべたまま、静かに答えた。

「あなた方を——試したかったんです」

その言葉に空気が張り詰める。

「……どういうことだ？」

シヴァの問いをはぐらかすように、男は目を伏せた。

「そのうち解りますよ」

「お前——」

男はシヴァを手で制止する。

「傷を、治しに来たんでしょう？」

アリシアは無言で右手を差し出した。
その手を取り、包帯をほどきながら、男はくすりと笑う。

「なんだ？」

「あ、いえ。巻き方があまりにも下手くそなもので」

「文句はこの人間に言え」

アリシアはシヴァを見もせずに言った。

「仕方ないだろ。そういうのは苦手なんだ」

無然とするシヴァを、男は驚いたように見た。

「あなたが手当てをしたんですか？」

「ああ」

「…驚いたな」

「…悪かったな、驚くほど下手で」

「あ、すみません。僕が驚いたのはそこではありません」

「じゃあなんだ？」

男はアリシアに向き直る。

「イヴェーレである貴女が、人間に身を委ねるとは思ってもみませんでしたよ」

「…何故分かった？」

「耳や肌を隠しても、神族である高貴さは隠しきれるものではありませんから」

そう言つて微笑む男を、シヴァは初めて注意深く観察する。

長い銀色の髪に、青の瞳。髪は後ろで纏められている。

物腰は柔らかく愛想もいいが、ただの優しい白師ではなさそうだ。

その証拠に、その青い瞳は時折シヴァに鋭い視線を向けている。

だがアリシアに対してはそうではなかった。

むしろ、そこにあるのは親しみと敬意。

（こいつ、アリシアを知っているのか…？）

男が包帯をほどく手を止めた。

「あなたは、この方がイヴェーレだと知った上で助けたのですか？」

「…ああ」

「そうですか——ではやはり…」

男は一瞬表情を曇らせたが、すぐにまた微笑んだ。

「この人間を信じられたのですね」

「信じてなどいない」

即答。

「……」

目の前で断言され、シヴァはさすがに言葉を失った。
その様子を見て、男は笑う。

「ふふ…ではそういうことにしておきましょう」

包帯がはずれ、右手の傷があらわになる。

黒く変色した部分は拡がり、模様のようにも見えた。

「これは——」

それを見て、白師は絶句する。

「どうした」

「…申し訳ありません…これは…僕には治しきれない」

「——そうか」

アリシアは動揺することもなく、男の言葉をあっさりと受け入れた。

しかしシヴァは、男の治せない、ではなく、治しきれないという言い方が気になった。

「治しきれないってどういうことだ？」

「傷自体を治すことはできます。しかし、この『呪』を解くことはできない」

「『呪』？」

「『呪』とは、上位の魔族のみが使うことのできる術で——簡単に言うと呪いのようなものです」

その言葉に、シヴァはあの仮面の男を思い出す。

（あいつ…魔族だったのか…）

「アリシアが呪われているということか？」

「はい。この黒い部分——これが『呪』です。『呪』が強すぎて…僕の力では…」

「その『呪』を解かずにいたらどうなるんだ？ 死ぬのか？」

男はいいえ、と首を振る。

「これは死をもたらすものではないようです。恐らく…この紋様が全身に拡がると、身体が利かなくなる——」

「身体が自由？ なんだか中途半端な呪いだな…」

「それが、あいつの目的なのだ…」

それまで黙っていたアリシアが、誰に言うでもなく呟いた。だがシヴァには聞こえなかったようだ。男を見たまま話を続けている。

「この『呪』を解ける奴はいないのか？」

「僕の知る限りでは、一人だけ」

「どこにいるんだ？」

「…カトルに行つて下さい」

「カトル——だと？」

男の答えに、シヴァは眉をひそめた。

「ちょっと待て。あそこは確か…」

言いかけて、アリシアに視線を走らせる。

カトル——それはこの街とは比べものにならないほどの大きな都市だ。

この地域で唯一の大聖堂がある為、人々は聖都カトルと呼んでいる。そしてカトルには、聖なる都であるが故に、一つの掟があった。それは、イヴェーレの出入りを禁ずる——というものだ。

聖都はイヴェーレを、【神族でありながら魔族と同じく地に堕ちた者】として、その存在を否定している。

街の中でイヴェーレだと気づかれれば、想像し得うる最悪の騒ぎが起きるだろうし、万が一、捕らえられたりしたら、人々の安全の為という大義名分のもとに、確実に殺される。

聖都にとってイヴェーレは、汚らしい【魔族】でしかないのだ。

「簡単でないことは分かっています。しかし、そうするより他に道はない。カトルにいる最高位の白師にお会いして下さい。——どんな手を使っても」

男はそう言うと、シヴァに向かってにつこりと微笑んだ。

「あなたがいれば、きっと大丈夫です」

「…意味が分かん」

「では、とりあえずこの傷を治しましょう」

釈然としないシヴァを再び無視し、男はアリシアの手を取って詠唱を始めた。

翌日、シヴァとアリシアは街を出た。

「傷はもういいのか？」

「ああ。傷口は塞がったし、痛くもない。『呪』のせいで動きはしないがな」

アリシアの傷を治した男は言った。

——『呪』の進行を抑えておきました。けれど、完全に止めることはできません。一刻も早くカトルに向かって下さい。

——僕が一緒にできればいいのですが、そうもいかないのです。

——またお会いしましょう。

男が結界を解く。

すると、散っていく白と共に男の姿も散りはじめた。

——旅の無事をお祈りしております。アリシヤ様。

何故アリシアの名前を知っているのか。
それを問う前に男は消え去り、家は本来の姿に戻った。

「アリシア、本当に知らないのか？」

「何度も聞くな」

では、向こうだけが知っているということか。
分らないことは他にもある。

男は何故、アリシアが傷を負ったことを知っていたのか。そして
何故、わざわざ治しに現れたのか。

シヴァは考え込んだが、アリシアはあまり気にしていないようだ。

「あいつが何者であろうとも…今は他に道がない」

「…それもそうだな」

立ち止まっていたシヴァは歩き出した。
が、今度はアリシアが歩みを止めた。つられてシヴァも止まる。

二人の間には、数歩の距離。

「どうした？」

「…本当について来る気か？」

「嫌か？」

一陣の風が、二人の間を吹き抜ける。

「——ああ」

アリシアは目を伏せた。

「私は人間を信じない。それに…言ったはずだ。私に関わると死ぬことになる、と…死にたくはあるまい？」

「俺は死なない」

「私は、お前が危なくなっても助けたりはしないぞ？」

「期待してない」

アリシアは呆れたようにため息をつき、問う。

「…どうしてそこまでこだわる？ 助けた恩を返せとでも言うのか？」

その言葉にシヴァは笑った。

「そんなつまらないことは考えてないさ」

「では、何故だ？」

「…俺は昔、イヴェーレに命を救われたことがある」

思いもよらぬ返答に、アリシアは目を見開いた。

「だから今度は俺が助けたい。それだけだ」

幼い頃、魔族に襲われていたところを助けてくれたイヴェーレ。いつかイヴェーレに出会うことができたなら、次は自分が助けるとシヴァは誓った。

「それが…お前が私を恐れなかった理由か…」

「ああ」

「……」

「だから、お前がどれだけ嫌がっても俺はついて行く。それに、俺がいた方がカトルにも入りやすいと思うぞ」

「…だが…」

「助けたいんだ、お前を」

シヴァはアリシアに背中を向けて歩き出す。

「…っ！」

アリシアは何かを言おうとしたが、言葉が出ないようだ。結局、何も言わずに、先に行くシヴァを追いついた。

そして前を向いたまま、シヴァに問いかける。その声は、少しだけ厳しい。

「いつまでついて来るつもりだ？ 人間」

「そうだな…お前が、ちゃんと俺の名前を呼んだら考える」

意外な答えだったのか、アリシアは驚いたように振り返った。
だがすぐにまた前を向いた。

「——ありえんな」

冷たく言い切るアリシアの後ろを、シヴァはゆっくりとついていく。

その顔には、何故か笑みが浮かんでいた。

空はどこまでも青く、広い。

高く飛ぶ一羽の白い鳥が、そんな二人を見送った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4971x/>

キズナ

2011年11月17日18時10分発行